# 城郭革命としての飯盛城

## －石垣・山城居住・聖地－

滋賀県立大学名誉教授

中井　均

### はじめに

戦国時代の山城は長く土の城と考えられてきた。文字通り土から成る防御施設として認識されてきた。ところが近年の発掘調査や詳細な分布調査によって西国では数多くの城跡から石積みが検出されるようになった。こうした事実からもはや戦国時代の山城は土から成る施設ではないことは明らかである。

さらにこれまでの戦国時代の山城のあり方として、山城は防御空間であり、普段は山麓に構えた居館を居住空間とする二元的構造であると理解されてきた。その典型例が越前の一乗谷朝倉氏遺跡である。越前の戦国大名朝倉氏の居館である義景館跡は山麓に堀を巡らせて構えられた居館であり、その背後の山頂には詰城である一乗谷城が構えられていた。ところが戦国時代後半には山城部分にも居住空間が構えられていたことが近江の小谷城や清水山城の発掘調査で明らかとなった。

このように 1970 年代以降戦国時代の山城研究は発掘調査の成果、縄張り調査、文献史料調査などから飛躍的に進んだが、最近の調査成果から再検討する段階に来ていることはまちがいない。

飯盛城跡では総合調査によって発掘調査や詳細分布調査が実施され多大な成果が明らかとなっている。ここではそうした飯盛城跡の調査成果を城郭史上に位置付けることにより飯盛城跡の特質を探ろうとするものである。

### 1．戦国時代の城郭石垣と石積み

戦国時代の山城で近年の発掘調査や分布調査で石垣や石積みの用いられていたことが確認されている。ここでは最初に石垣と石積みについて確認しておきたい。北垣聰一郎氏は隅部のあるものを石垣、築石部のみで隅部を持たないものを石積みとされた（北垣聰一郎 1987『石垣普請』法政大学出版局）。

一方、筆者は背面に裏込め石（栗石）を充填させるものを石垣、地山や盛り土面に直接石を積むものを石積みとした。当然ながら裏込めを充填す

るものは高く積むことができるが、裏込めのない石積みは高く積むことができない。高石垣の出現は裏込めを充填することによって可能となったわけであるが、そこには職能集団としての石工たちの存在も重要である。石垣とは裏込めを用いて積むことのできる職能集団が存在することによって成立したとも言えよう。

高く積み上げることができない石積みは土塁の裾部に２～３段程度積むもので、土留めとして用いられたものと考えられる。近年の調査で確認された石垣の大半はこの石積みであり、裏込めを充填させる石垣の検出事例は極めて少ない。戦国時代の山城で近年数多くの石垣が検出されており、もはや土から成るものとは言い難いとしたが、実はその大半は石を積んでいるとはいえ、石積みなのである。

さらに興味深いことにこうした石積みも長野県松本市周辺を北限として、それより北方の関東・甲信越・東北ではほとんど見ることができない。東国は土から成る城であった。こうした土造りによる築城は近世城郭にも影響を与えている。

ところが飯盛城跡に残された石垣では背面に裏込め石を充填させていることは石材間の隙間からもうかがうことができ、石積みでないことは確認できる。つまり戦国時代ではまだ数少ない石垣であることがわかる。

戦国時代の山城で明らかに石垣を用いるのは近江守護六角氏の居城観音寺城と、六角氏と関わりの深い佐生城、小堤城山城、三雲城などである。観音寺城では金剛輪寺所蔵『下倉米銭下用帳』の記録より弘治２年(1556)には石垣の存在したことが知られる。

一方、織田信長も自らの居城には石垣を導入しており、永禄６年(1563)に築いた小牧山城で発掘調査の結果石垣によって築いていたことが明らかとなっている。また、永禄10年(1567)築城の岐阜城でも石垣を用いている。そして天正４年(1576)築城の安土城ではほぼ城域のすべてが高石垣によって築かれている。

飯盛城の石垣は永禄３年(1560)に三好長慶が本拠とした段階に築いたものと考えられる。それ以前に居城としていた芥川城の石垣が極めて部分的な使用であるのに対して城域のほぼ全体を石垣としていることに発展過程をうかがうことができる。

この飯盛城の石垣の石材は飯盛山の花崗岩を用いており、岩盤の摂理に沿って割り取っていたことは李聖子氏によって明らかにされているところである。

ここで注目しておきたい点は巨石を部分的ではあるが用いていることである。最大のものは長辺が1.5mを超えるものであり、城道に対して虎口

となる部分に用いられていた鏡石と見られる。また、南虎口でも正面に対して右脇の石垣の石材は方形を意識した大振りのものでやはり虎口に対する鏡石と見てよい。こうした巨石使用は芥川城の大手谷筋に構えられた石垣にも認められるもので、長慶の築城に導入された石垣には鏡石として意識的に巨石を使用していたことがうかがえる。

写真１　飯盛城石垣の折

写真２　観音寺城の直線的な石垣

私が注目する点はもうひとつある。それは石垣に折を設けていることである。折を設けるのは土塁も含めて、横矢を掛けるための迎撃施設として捉えられる場合が多い。もちろん虎口に対して明確に折を設ける土塁、石垣の塁線はこうした横矢掛けの迎撃施設として構えられたものである。しかし、飯盛城の場合、主郭東辺の長大な石垣に何ヵ所か設けられているのであるが、その規模は極めて小さく、石垣の上部で城兵が横矢を掛けるようなスペースはない。むしろ長大な石垣が築石だけでは崩れる可能性が高いため、あえて折を設けて隅角部を造り出すことによって崩落を防いだ技術的な施設であった可能性が高い。（写真１、写真２）

こうした崩落を防ぐ目的で構えられた折は徳川大坂城の南外堀などで顕著であり、日本城郭の石垣構築の技術的な施設として評価出来得るもの

である。

なお、石垣の背面に栗石が確認できることより飯盛城は石垣として評価できるが、加えて鏡石の配置、墨線に折を設ける技術から石積みに関わる職能集団が築城に関わっていたことは間違いない。そうした職能集団がどこから動員されたのかが今後の研究の課題となるだろう。

## 2．山城に居住する

冒頭に述べたように戦国時代の山城は住む施設ではなく、防御としての戦う空間であった。そのため山頂部から検出される遺構は倉庫などに使用された小規模な掘立柱建物が大半である。

ところが戦国時代後半になると山城部分からも巨大な礎石建物が検出されるようになる。近江守護六角氏の観音寺城では山上の本丸、平井丸、池田丸からそれぞれ数棟の礎石建物が検出されている。特に池田丸では曲輪いっぱいに巨大な礎石建物が構えられていた。同じく近江の事例であるが湖北の戦国大名浅井氏の小谷城からも山上の大広間と呼ばれる曲輪から巨大な礎石建物が検出されている。また、西近江の高島七頭の惣領である越中家の清水山城からも山頂主郭で御殿と見られる礎石建物が検出されている。

こうした戦国時代後半に山頂部分から礎石建物が検出された山城では山麓部に居館も構えられている。また、発掘調査は実施されていないが方形に区画された曲輪は居住施設として利用されていたと考えられる山城として一乗谷朝倉氏遺跡がある。

どうも戦国時代後半になると守護や戦国大名は山上に居住施設を設けるようである。但し、重要な点はこうした山頂部分に居住空間を構える山城では山麓部にも居館が構えられている構造である。山麓、山上いずれにも居住空間を設けるのはそれぞれに違う用途が存在したためと考えられる。

恒常化する戦争は一国単位の大規模なものとなっていくなかで、女性や子供などをはじめから安全な山城に住まわせるようになったのではないだろうか。織田信長を岐阜城に訪ねたルイス・フロイスは誰も登ることを許されなかった山上に招かれ、そこで信長に仕える妻と子供に会ったと報告している。岐阜城も発掘調査の結果、山麓部で信長居館と呼ばれる居住空間が検出されている。

戦国大名クラスの居城では戦国時代の後半になると、公的な儀礼空間として山麓居館を主殿とし、私的な居住空間として山城に常御殿を構えたものと見られる。

長慶が飯盛城の前に居城としていた芥川城では発掘調査の結果、主郭か

ら御殿と見られる礎石建物が検出されている。飯盛城では千畳敷と呼ばれる広大な曲輪からも礎石と見られる石材が検出されている。芥川城のように整然と並ぶ礎石は検出できなかったが、これらは近代以降の攪乱とみられ、本来は千畳敷に礎石建物が配置されていたことはまちがいない。（写真３、写真４）

写真３　清水山城主郭礎石建物

写真４　飯盛城千畳敷

一見すると芥川城や飯盛城での山上居住も観音寺城や小谷城と同じような構造と捉え、山上を常御殿と考えるのは早計である。両者には根本的な違いが認められる。それは山麓居館の有無である。実は芥川城も飯盛城も山麓に居館と考えられる伝承地、地籍の痕跡が一切認められないのである。つまり芥川城、飯盛城ともに主殿、会所となる施設と常御殿となる施設は一体として山上に構えられていたこととなる。

2021 年の発掘調査で岐阜県の大桑城、篠脇城から山上で庭園と見られる遺構が検出されて話題となったが、芥川城、飯盛城ともに山城に御殿を構えていたが、庭園も山上に設けていた可能性が高い。こうした山上での御殿のあり方はそれまでの室町的な将軍邸、守護所の否定であり、長慶による新たな築城として評価できよう。

ちなみに織田信長の居城である小牧山城、岐阜城、安土城では石垣を用いているが、山麓に居館を構えている。信長はこの３城で、高石垣、瓦、天主を備える城郭を築くが、いずれもが山城で山麓に居館を持つ構造は二

元的構造を脱していないことがわかる。長慶は信長の築城とは違う新たな城郭を指向していたのであろう。

## 3．聖地としての城郭

近年の著しい城郭研究成果のなかで考古学、文献史学のいずれもが注目するものとして聖地と城郭という視点がある。これまでの城郭研究では城は交通の要衝であるとか、軍事的要衝に築かれるものとして理解されてきた。しかし、守護の山城では近江六角氏の観音寺城が西国観音霊場の観音正寺に築かれていたり、出雲の戦国大名尼子氏の富田城が式内勝日高守神社の社地に築かれている。これらは偶然ではなく、地域の信仰の聖地に城を築くことにより守護が信仰の場を守ることを領民に示すために城郭を構えたものと考えられる。

一方で城郭のなかに聖地を取り込んで城の守護としたものも確認できる。永禄 12 年（1569）に山科言継が岐阜城に信長を訪ねた際に、言継は信長に「上之権現」を案内されたと記している。この「上之権現」こそ、現在復興天守の前面にそそり立つ岩盤に建てられていたものではないかと考えている。本来城郭の曲輪は削平して平坦面を確保することとしているが、岐阜城の本丸は平坦となっていない。岩盤を削り残しているのである。これは明らかに意識的に削り残して何らかの施設として利用していたものと見られる。

信長の居城は小牧山城が間々乳観音降臨の霊場に築かれている。岐阜城も伊奈波神の故地であった。信長は斎藤道三の稲葉山城を引き継ぐがその際に本丸の造成で岩盤を削り残して磐座とし、そこに権現社を祀ったのであろう。築城とともに聖地化を図ったのである。

同様の構造が飯盛城でも見られる。天野忠幸氏の研究により長慶が飯盛築城で最初におこなったのが新羅明神を城内に勧請することだったことが明らかにされている。これは城内に長慶の祖先源新羅三郎義光を祀る行為として注目される。実際に勧請されたか否かはわからないが、私はその有力候補地が御体塚丸ではないかと考えている。

御体塚丸の構造は極めて異常である。元来曲輪とは兵の駐屯場所であり、平らに削平された場である。ところが御体塚丸はそう大きくない曲輪面の中央にマウンド状の岩盤が削り残されている。それはまるで塚のようである。永禄７年に死去するに際して自らの死を３年伏すように遺言し、その遺体を葬ったために御体塚丸と呼ばれるようになったと伝えられている。

一見すると確かに塚のようであるがよく見ると盛土ではなく、岩盤を削り残したものであることがわかる。やはり曲輪造成としては極めてイレギュラーな構造である。おそらく磐座として削り残したものと考えられる。（写真５、写真６）

写真５　岐阜城本丸の岩盤

さらに岩盤の前面が四條畷市によって発掘調査され、塼貼の建物と、石列が検出された。小面積の発掘調査で全貌をうかがい知ることはできないが、やはり通常の城郭施設ではないものが建てられていたようである。加えて出土遺物のなかに脚付土師器皿という中世土器では極めて珍しい形の土器が出土している。口縁部に煤が付着していることより灯明皿として用いられていたことは明らかである。實盛良彦氏によるとこうした脚付土師器皿は中世奈良町からの出土例があることを指摘し、祭祀に伴う灯明皿であったことを明らかにされている（實盛良彦 2021「飯盛城跡出土の台付皿と「御体塚」」『中世土器研究』141 号）。

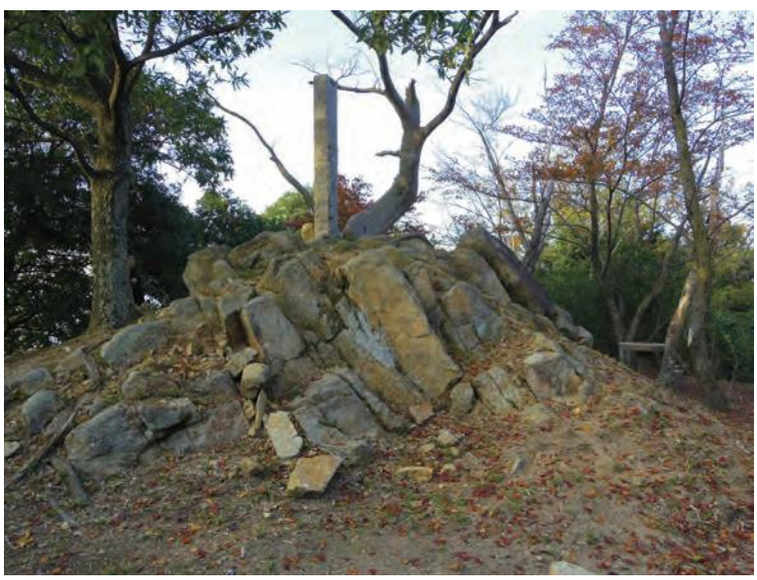

写真６　飯盛城御体塚丸

私は御体塚丸こそが長慶によって勧請された新羅明神社として磐座を造成し、その社として塼貼建物と石列建物が造営されたものと考えている。城内に聖地を造営した事例として評価できよう。

## おわりに

天正４年（1576）の織田信長による安土築城は日本城郭の革命的変化であった。石垣、瓦、礎石建物から構成される築城は、それまでの軍事的な防

御施設としての城郭とはまったく別の施設となった。それは政権のシンボルとしての見せる城の誕生であった。

しかし、中世的な城郭の革命的変化は信長だけが指向したものではなかった。永禄３年（1560）に三好長慶による飯盛築城でも石垣、礎石建物などが導入されていた。また、一乗谷朝倉氏遺跡でも巨石を用いた石垣や、矢穴技法によって割られた石材による石垣構築も明らかとなっている。近江観音寺城でも矢穴技法によって割られた石材が石垣に用いられている。石積みから本格的な石垣を城郭へ導入する変化は決して信長だけではなく、このように各地でおこなわれていたのである。

こうした石垣の構築はそれぞれの特徴を有しており、石垣構築に様々な職能集団の関わっていたことがうかがえる。単純に石積みは近江の穴太とは限らないことを示唆している。飯盛城では巨石使用と折の使用があるが、とりわけ他の城郭石垣では認められない折に特徴がある。このあたりに長慶が動員した職能集団を絞り込むことができそうである。慈照寺銀閣で検出された石垣には花崗岩の石材が矢穴によって割られたことが明らかになっている。これは将軍足利義政によって文明 14 年（1482）に築かれた東山山荘に関わる石垣と見られる。同様に花崗岩を矢穴技法で割った石材を用いた 15 世紀後半から 16 世紀前半の石垣が田辺城（京都府京田辺市）でも検出されており、同一の職能集団によって積まれた可能性が高い。将軍の山荘造営に動員されたことより京都の職能集団であった可能性が高い。

一方、飯盛城の石垣に矢穴技法によって割り取られた石材は確認されていないことより慈照寺銀閣や田辺城に関わった集団とは別の職能集団であった可能性が高い。その実態解明は今後の課題としておきたい。

一方、山上居住は従来の二元的構造を捨てた新たな山城居住形態である。これは山麓の住民に山城に住んでいることを誇示するためではなかったかと考えられる。山麓より見上げさせることが重要だったのであろう。山上で相論の調停や連歌を詠むという政治、文化の空間を設けたことは長慶の居る山を見上げされることが重要だったのであろう。一方で山麓を見下ろすことも重要だったのである。山上で武威と権力を示したのであった。

また、これまで山城と言えば軍事的防御施設としての視点で分析されてきたが、軍事とは真逆の信仰の場としても重要な空間であったことが明らかになりつつあるが、飯盛城では御体塚丸が現存する構造、文献史、考古学から信仰の場として築かれたものであることが明らかにできた。これも今後の城郭研究の典型事例として位置付けられる。

このように石垣、山上居住、聖地論から飯盛城は信長とは違う革命的変化を遂げた戦国時代の山城として評価できよう。